

NPO法人 長野都市経営研究所

発行/NPO法人 長野都市経営研究所 〒380-0834 長野市大字鶴賀間御所町1289-1 丸本ビル2F TEL 026-235-7911 FAX 026-235-6166 http://www.nupri.or.jp E-mail: nupri@nupri.or.jp

第15回NUPRI定時総会開催

「スポーツ」を核に、長野の元気を応援!

去る6月22日(月)、第15回NUPRI定時総会がホテル国際21にて会員103社のうち83社(うち委任状44)の出席により開催されました。

市川理事長の挨拶に続き、議長を選出・議事録署名人を選任し、平成20年度の事業・決算報告ならびに平成21年度事業計画・予算(案)が上程され、各議案とも満場一致の承認を得ました。また、理事欠員に伴い藤牧雄一郎氏が理事に追加専任され、あわせて従来の「常任理事」呼称を「専務理事」とする議案が承認されました。

議事に続き、アネックスインフォメーション(株)の「アネックススノーボードクラブ」所属のプロスノーボーダー山岡聡子氏の講演会および懇親会が開催され、スポーツを核とした地域づくり、人づくりについて、企業としての関わり方や支援のかたちを改めて考察する機会となりました。なお講演後、アネックススノーボードクラブ監督・若林順平氏および山岡さん本人より、NUPRIが取り組む「スポーツによるまちづくり」に賛同の旨のご挨拶があり、ご寄付を頂きましたことをご報告します。

市川理事長 挨拶



先頃閉幕した善光寺御開帳ではNUPRIも積極的に支援を行い、過去最高の観光客数や賑わいを記録するも、経済効果の面では今ひとつという結果が報じられました。また平成26(2014)年の北陸新幹線延伸が着々と迫り、今後の長野をどう活性化するか切実な課題となつてまいりました。その意味においても、「長野の元気を支援する力」として、NUPRIの役割はますます大きくなっている訳ですが、今年度もスポーツ振興を核に据え、手を携えて地域の賑わい創造に寄与していく所存です。

また、NUPRIから誕生した鷲澤長野市長が、今秋の市長選に際し三選出馬の意思を表明されました。地域づくりとともに推進する仲間として、全力で応援していきたい考えです。景気動向は必ずしも芳しくない昨今ですが、NUPRIの明るく元気な活動が地域を元気づける、そんな方向で夢のある施策を実現させていきたいものです。たとえば現在、東京が平成28(2016)年のオリンピック招致に向けた活動を展開していますが、長野も1998年の成功実績を子どもたちに次の夢としてつないでいく意味で、冬季オリンピックを再度招致することを視野に入れながら、「スポーツのまち」をめざす方向もあるのではないかと思うのです。本日の講演もそのような思いから企画しております。明日に向けた前進の糧としてご静聴ください。

平成20年度事業報告

平成20年度は「Breakthrough with Sports Powered by NUPRI」～「スポーツで切り拓く長野の未来」をキャッチフレーズに、4研究部会2特別委員会を中心として若手会員の活力を生かす方向で活動を展開してまいりました。

財務面ではエムウェーブからの返還出資金の活用スキームの検討、また会員相互の融和を図る訪問活動や、わいがやサロンの実施等に取り組み、実績を重ねてまいりました。

しかし、折からの景気減速に伴う会員数の減少歯止め対策をはじめ直面する課題は困難を極めており、決算報告も赤字とせざるを得なくなりましたことをご了承いただくとともに、引き続き皆様のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

平成21年度事業計画

【NUPRIの活動方針】

WBC優勝を果たした「サムライジャパン」や、FIFAワールドカップ予選突破の「オカダジャパン」の活躍等でスポーツのパワーを感じる機会が増えていることを受け、今年度もスポーツを核とした地域活性化をメインに、長野の元気を応援してゆきます。NUPRIらしい明るく活気ある活動の展開に、皆様のご支援をお願いいたします。

【「わいがやサロン」〈岩野彰座長〉の活動】

今年度は人間の生活に欠かすことのできない「食」をテーマに掲げます。

まずは身近な「食」の生産から消費のプロセス（農業・醸造・調理・おもてなし・グルメなど）について、さまざまな角度からこだわりを持って取り組んでいる人や団体から講師を招き、お話を聞いたり体験したりして、奥深いテーマに迫りたいと考えます。「食」に関しユニークな取り組みをしている人・団体をご存知の方は事務局へご一報ください。

【平成21年度研究部会と特別委員会】

1 新産業創出研究部会

〈竹内伊吉部会長〉

今年度から来年度にかけて、生産者から消費者への直接的な販売方法の検討、展開ならびに農業の事業化に向けた企業の連携、調査等を行いたいと考えます。また、中期的には団塊世代の余暇時間増大を受け、滞在型観光における地域資源として「農業」をとらえ、「体験」「安全・安心」「自然豊かな環境」の視点から提案していきます。

具体的施策として、「取れたて野菜市」「リンゴの木のオーナー制度」「自然農法の研究・啓蒙」について、引き続き継続・拡充を図っていきます。

2 スポーツ・街づくり研究部会（スポ街）

〈鷺澤幸一部会長〉

引き続き「スポーツを核に長野の元気を応援しよう」を核に、まずAC長野パルセイロのJFL・Jリーグ昇格を地域ぐるみで支援するため、「ホームタウン長野推進協議会」を通じ、青少年サポーターの育成と地域との連携に注力してゆく考えです。また、財政弱体化に備えた支援もしていきます。

その他、野球、アイスホッケー、馬術等、長野地域に根ざす可能性のある各部門にも目を向けて取り組んでいきます。

3 Strategy 2014 研究部会（ストラテジーニイマルイチョン）

〈夏目潔部会長〉

2014年度、新幹線は金沢まで延伸します。これにより県内観光や産業はどう変わるのか。県や沿線5市町村でつくる新幹線建設促進協議会により公表された報告書によると、延伸による時短の影響は観光においては北陸優位とされ、県内奮起が提言されています。

NUPRIとしては、こうした行政や商工会議所の動きとは一線を画しながら、アゲインストの風的確に対応できるまちづくり団体として、どこよりも危機感を持って戦略的・具体的な施策を提案したいと考えています。

4 中心市街地活性化特別委員会

〈清水光朗特別委員長〉

前年度に引き続き「歩きたくなるまち」、そして「参加したくなるまち」へと、季節に合わせて地域のイベント（長野灯まつり・ながの花フェスタ・長野マラソン・車いすマラソン・大道芸フェスティバル・NAGANO門前ジャズストリート等）を支援してゆく考えです。

5 TMO特別委員会

〈夏目潔委員長〉

株式会社まちづくり長野（もんぜんプラザのトマト食品館・ぱていお大門・表参道もんぜん駐車場・楽茶れんが館）の事業については、期初より善光寺御開帳による好影響を期待するところですが、さらなる改善工夫が求められます。特に「ぱていお大門」については会員各位のアイデアや提言に期待するところです。

NUPRI 講演会

プロスノーボーダー

講師 プロスノーボーダー 山岡 聡子 氏

アネックスインフォメーション株式会社
アネックススノーボードクラブ所属

総会に続き、長野市出身・在住のプロスノーボーダー（ハーフパイプ）・山岡聡子さんの講演会が開催されました。山岡さんは2006年トリノ五輪に日本代表として出場し、決勝進出を果たしたほか、アメリカのウィンターXゲーム、FIS世界選手権大会等数々の国際大会で上位成績を収め、今年2月にはカナダ・ストーンハムで開催されたワールドカップで3期ぶり6度目の優勝に輝きました。ハーフパイプのプロとしては日本女子の先がけ的な存在であると同時に、現在も最前線をひた走っています。

なお記載内容は約1時間30分の講演の中から一部を編集部が抜粋、要約したものです。

**うまくなりたい！プロになりたい！
世界で戦いたい！**

こんにちは。スノーボードのハーフパイプという種目で選手をしております山岡聡子です。2006年トリノ冬季五輪には日本代表として初めてオリンピックに出場しました。

私が初めてスノーボードを履いたのは、1998年

長野オリンピックの時でした。その当時、長野市内の企業に勤めていましたが、初めて取り組んだスノーボードの魅力にはまってしまい、毎日滑りたい、スノーボードばかりやって日々を過ごしたい、もっとうまくなりたいという思いが募り、ついに退社を申し出るに至りました。入社1年目で、スノーボードを理由に退社なんて、どうかしていると、普通は思うでしょうね。会社から思いつどまるように言っていたいただきましたが、私の気持ちは変わりませんでした。会社を辞める理由が必要で、私は「オリンピックに出場するような選手になります！」と宣言したのです。でも正直言って、そのためのすべはまったく知りませんでした。

翌年の9月から10月にスイスへ渡り、海外キャンプに初参加しました。コーチの指導を受けて、選手としての技術や実力を身につける本格的な海外練習です。そこで初めて「プロスノーボーダー」と呼ばれる人と出会い、スノーボードの世界で生きていくためのさまざまな情報やアドバイスをいただき、大会で実績を重ねていく必要があることを知りました。

その冬、自分の実力も他の人の力量もまったく知らない状態でエントリーした全日本選手権で、いきなり1位で予選を通過する幸運に恵まれました。決勝では緊張のあまり最下位に甘んじましたが、このとき私は改めて気づきました。会社を辞めてまでやりたかったことは、世

界を舞台に戦うことだったのだと。実は、これは幼い頃から漠然と思い描いていた夢でした。たまたまスノーボードという世界で、それを見つけたのでした。そして、その実現のために、私は迷うことなくプロとして歩むことを決意しました。

食べていける、プロをめざす！

2001年、プロツアー第一選で優勝を果たし、念願のプロ資格を取得しました。しかし、それまではほぼ無収入。夏の間、必死でアルバイトをして資金を貯め、キャンプや大会の情報をも自分で調べて入手し、参加にあたってはフライトチケットも宿もエントリー手続きも、すべて自分で手配するのが当たり前です。

そんなある時、海外練習に参加するために行ったスイスで、行くなり置き引きに遭い、無一文になりました。荷物の中には、ご飯を炊くために持参した炊飯ジャーも





ありました。パスポートも盗られてしまったため国籍不明者となり、宿に宿泊することさえできません。チューリップ空港駅で野宿して、領事館の方が書類を整えてくれるのを待った経験も、今では懐かしい思い出です。でも、こんな経験はプロスノーボーダーにとって、決して珍しいことではないのです。プロになるまでの収入がないのももちろんですが、プロになったからといって、それで食べていける世界ではないことを、私はプロになって思い知りました。

プロとしてやっていくには、年間プロ登録料が8万円かかります。プロツアーで優勝すると、賞金は18万円。シーズン中の全大会で優勝しても100万円に届きません。全部優勝なんて、まずあり得ませんから、食べて

いける所得になるわけがないのです。そこで、選手は皆スポンサーとなってくれるメーカーや各種企業と契約して、活動資金を確保しています。でも、複数企業と契約しても、せいぜい年間30万円程度。不況のあたりを受け、多くの企業に余裕がなくなり、契約すること自体がむずかしい時代を迎えていました。

そこで私は自分が契約するスポンサーに「大会で優勝したらボーナスをくれ」という、無謀ともいえる交渉をしたのです。当時、W杯で優勝経験を持つ日本人スノーボーダーはわずかに3人。いずれもすでに引退し、第一線を退いていました。そう簡単に優勝なんかするものかと思っただけでしょう。メーカーも気楽に交渉に応じてくれました。

その年の大会で1回、翌年には2回優勝することができた私は、約束通りボーナスを得て、なんとか年間の活動費を確保することができました。ナショナルチーム入りを果たすこともできました。メーカーは驚くと同時に喜んでくれましたが、こちらは死活問題ですから必死です。もし勝てなかったら、次の冬の活動資金はありません。技術的には「プロ」と認定されるころまで来た、世界の舞台でもトップを競うレベルにある。でも、資金面では常に不安。頼みのメーカーも、前の年の売り上げ次第では契約打ち切りの可能性もあるわけで、いつも「稼がなくては」というプレッシャーが消えない状態でした。

この不安定な状態がプロとしてベストではないと感じた私は、2003年にFISワールドカップで初優勝したのを機に、一般企業にスポンサーになってもらうための活動を開始しました。

「プロ」としての使命

ところが、思いがけず苦戦を強いられることになりました。スノーボードと直接縁のない一般企業がスノーボーダーを支援している前例というのが、ほとんどない

のです。「W杯で優勝実績があります、スポンサー企業を探しています」と訴えたところで、たいいていの企業では門前払いでした。前例がないことだけに、相談できる人もいません。スノーボードがマイナーなスポーツであることを、これほど思い知ったことはありませんでした。幸い、アネックスインフォメーションが話を聞いてくれ、2004年に私を社員として雇用してくれました。現在、営業部OA課の社員として在籍させていただいていますが、プロスノーボーダーとしての活動を存分にさせていただき、大会出場に際しては社として応援してくださっています。それまでの日々を思い出すにつけ、今がいかに恵まれた環境であるかが身に染みます。そして、こうした環境に身を置けたことで、これからプロとしてがんばろうという人たちに、何か伝えていけるのではないかと感じるので。

もっとうまくなりたい、強くなりたいと、無我夢中で滑った日々。お金を稼がなくてはと、賞金を目的に大会に参加したり、スポンサーを探してあちこち歩き回る日々。相談相手がなく、ひとりで悩み迷った日々。それが、今は未来を考え、後に続く人々のことを考えている





私がいいます。実は「プロ意識」というものは、こういうことなのかと改めて思う昨今です。

定職に就かず、その時々アルバイトで日々をしのいだり、節約するために車中泊で大会を転戦したりしていた時期は、それはそれで必死でしたし、プロとして精一杯の取り組みでした。でも今は、パフォーマンスや体調管理も、プロの重要な仕事だと思えます。後に続く人々を「プロでは食べていけないんだ」と落胆させるのは、本当のプロとはいえないと、今は思うのです。

競技はもちろん自分のために全力を尽くすもの。でも、応援し、支えてくださる人がいてこそ、競技に全力を注げるのです。そして、より多くの人々がこの世界に魅力を感じ、参加してくれば、スポーツとしてもっとメジャーになり得ます。スノーボード業界という、自分が大好きなことをする環境を守り、もっとよいものにしていきたい、そのために、プロとしてすべきことをしていきたいと思っています。

「日本代表」としての発言・行動

2004年のFISワールドカップで種目別総合優勝を果たし、日本人選手としては8人目くらいとなる「クリスタルトロフィー」を授与されました。男子複合の荻原健司さんや上村愛子さんが獲得されているものです。その頃から、周囲の皆さんが単に選手としてだけでなく「日本の代表」として、私の発言や行動に注目しているというのを感じようになりました。

2006年にはトリノ五輪の代表として10位となり、北米で注目度の高い「Xゲーム」でも入賞。その後も数々の大会で優勝や入賞を果たす中、「登録」や「資格」に縛られず、国内でも国外でも胸を張って「私はプロスノーボーダーです」と名乗ることのできる自信が身につけてきた気がします。自分に恥じない、人に恥じることはないプロスノーボーダーとして、生涯スノーボードと関わっていくことが、私の目標です。

バンクーバー、そして未来へ

2010年バンクーバー冬季五輪の日本代表選手が、半年後に決定します。現在、日本の女子選手としてはトップに位置していますが、まだ決定にはいたっておりません。日本代表に選ばれば、おそらくハーフパイプ界では世界最高齢の選手ということになるでしょう。

初めてスノーボードに触れた時、すでに24歳だった私は、その時点で体力や勢いだけで突き進んでいけるという段階にはありませんでした。その条件下で常にいろいろ考え、乗り切り、ここまでやってきました。世界トップレベルの選手たちのほとんどが10代という中で、メダルを獲得するのは生やさしいことはありませんが、精一杯戦ってくるつもりです。選手に決まりましたら、皆さん、どうか応援よろしくお願いいたします。



「スポーツによる地域づくり」を掲げるNUPRIにとって、地元企業の一社員であり、同時にプロスポーツ選手である山岡さんは注目の存在。講演の後、会員からは普段の業務や今後の目標など、さまざまな質問が出され、活発な質疑応答が繰り広げられました。

また、続く懇談会でも、鷲澤長野市長を交えたなごやかな歓談のひとときが持たれました。

講師プロフィール

やまおか そうこ
山岡 聡子 氏

1974（昭和49）年長野市出身、在住。長野市内の広告制作会社に勤務していた1998年（長野冬季オリンピック開催年）、初めて経験したスノーボード（ハーフパイプ）に夢中になり、プロをめざして本格的な活動を開始。2001年 プロツアー第一戦で優勝、プロ資格を獲得。2002年 FIS公認国内大会に全日本選手権を含め5戦優勝、FISワールドカップ初出場6位、ナショナルチーム入りを果たす。2003年 FISワールドカップ初優勝。2004年 ワールドカップ種目別総合優勝。2006年 トリノオリンピックに日本代表として出場10位、アメリカのウィンターXゲーム3位、日本オープン優勝。2007年 FIS世界選手権大会2位。2009年 3期ぶり6度目のワールドカップ優勝を果たす。

お知らせ!!
NUPRIのwebサイトで
会員企業の活躍を
ご覧ください

「人・まち・しごと」 NUPRI会員に聞く

現在HPで掲載中の「企業訪問コーナー」を誌面上で紹介します。不況に立ち向かい、果敢に事業活動を展開している会員各位の本音や、地域の活性化への思いを熱く語っていただいています。その業種ならではの事業アイデアやトピックスなど目からウロコの情報もふんだん!

人・まち・しごと

第1回



学校法人 黒木学園
理事長
黒木 亮谷 さん
(2008年10月14日取材)

「地域社会の一員たる人材」を育てることが
今、教育に求められる大きな役割だと
痛感しています。

すぐに生きる仕事のスキルを身につけるだけでなく、コミュニケーションがきちんとできる「人間力」をばぐくむ教育に取り組み、可能性に満ちた若者たちを「即戦力」として地域社会に送り出している黒木学園。「人づくり」「企業づくり」「地域づくり」への思いをうかがいました。

まちづくりを考える時、何より大切なのは「まち」を支える「人」を育てることではないでしょうか。幼稚園、専門学校、ビジネススクールを展開する黒木学園は、まさにその実践に取り組んでおられる企業だと思えますが、黒木理事長の「人づくり」への思いとは?

黒木/少し前までは「まちづくり」というのは、市街地の情景であったり、そこで生活する人々の都合よさだったりというイメージでした。しかし、昨今は「まちづくり」は「人づくり」そのものだという実感を持っていきます。地域をつくっていくのは、人のエネルギーであり、人と人との交流であるということ、非常に強く感じます。私どもの専門学校は、地域に根ざし、地域社会で働く人材を育成しています。地域の産業や経済のニーズに応じた、さまざまな分野のプロを育てることを目的としています。その根幹にあるのは「地域社会の一員たる人材」を育てることにはなりません。

具体的には「人とのコミュニケーションがきちんとできる人」ということになるでしょう。どんな職業分野でも、どんな職種でも、あらゆる仕事は人と人とのコミュニケーションを基本としているからです。ですから、小さなことですが「あいさつがきちんとできること」「自分の要求や考えを言葉で伝えること」を、学校生活の中であたりまえにできるよう指導しているわけです。

自動車整備科、デジタルクリエイションコース、ブライダルコースなど、長野という地域では非常に目新しい学科・コースを開講し、幅広い職業分野に対応できる人材育成に取り組んでおられる。その発想の新しさ。柔軟性が、黒木学園の大きな個性となっていますね。

黒木/「地域の産業が求める人材を育てたい」という思いからさまざまな学科・コースを新設してきました。たとえば、長野では、ほとんどの地域で車がないと生活できません。県民の車の保有台数が多く、当然、整備

や各種手続きの場が必要なのに、自動車整備に関わる人材を育てる機関がひとつもありませんでした。その結果、「長野陸運局」も存在しないという結果になっていくわけです。整備工場はたくさんありますが、そこで働くために、今までは県外の学校へ行かなくてはならなかった。そうすると、そのまま県外企業に就職する人材もたくさん出てくる。地域の産業にとっては、ある意味、優秀な人材の損失ですね。地元で養成できれば、地元の業界で力を発揮してくれる確率が高い。そんな発想から、自動車整備科を新設しました。

美容師、ブライダル、デジタルクリエイターなども、地域にニーズがあります。都会へ出た方が刺激的で華やかな仕事ができると考える若者は、もちろん多い。しかし、インターネット時代の今、地方に根をおろして全国を相手にする仕事、あるいは全国レベルの高度な仕事をする企業は確実に増えています。そこで活躍できる人材を育てたいと考えているのです。

地元の人材と地域の企業とのマッチングを図ることが、自立した地域づくりの原動力のひとつになっていくでしょうね。

黒木/NUPRIに参加した一番の目的は、そこにあります。「まちづくり」という目的を共有する地元企業の皆さんと、「人づくり」「企業づくり」「地域づくり」について、率直に意見交換をしていきたいと考えています。

学校法人 黒木学園

本部所在地 長野市若里 4-5-45
TEL 026-225-1616
URL <http://www.kuroki.ac.jp/>

人・まち・じぶん

第2回



株式会社みすず工業
代表取締役社長
林 宏道 さん
(2008年11月20日取材)

「倫理観」と「良識」。
「一步前へ踏み出す時の判断基準は、環境に直結する事業に、偽りやごまかしは許されません。」

産業廃棄物処理の専門企業として長野県を中心に、広く関東甲信越、中京エリアの企業や団体のニーズに
応えている株式会社みすず工業。

地球環境に直接影響をおよぼす事業に携わる企業として最も大切に行っているのは、**「コンプライアンス」**であり、自らの**「あるべき姿」**を常に見据えることです。

環境保全の重要性が世界規模で叫ばれるようになり、産業廃棄物の処理を適切に行うことができる専門企業のニーズはますます高まっています。御社も特化技術を生かし、「環境企業」としての取り組みをアピールしておられますね。

林／昭和60年に化学系産業廃棄物の中間処理工場を建設して以来、当社は廃液処理の分野で他をリードする専門企業として実績を重ねてきました。昨今では、廃液を処理するだけでなく、ニッケル、銅などの金属を回収して資源として循環利用する技術を確立し、事業そのもの

のが環境保全に直結するという方向性がより明確になってきています。

先代である父が廃棄物の回収・運搬業として創業した昭和43年当時は、社会に「環境保全」の意識も視点も育っておらず、産業廃棄物に関する法律さえ整っていない時代でしたから、比較すると、まさに隔世の感があります。

「日本の屋根」とも称され、本州の中でいわば最も川上に位置する長野県で、水を扱う事業に携わる意義は大きいですね。

林／はい。地域の環境、ひいては地球環境に直接影響をおよぼす企業として、コンプライアンスを何よりも重く見ています。法律を守るのは最低限。常に倫理観に照らして正しい判断ができ、良識ある行動を取れる企業でなくてははいけないと思うのです。

もちろんお客様へのニーズに応え、企業を成長させていくための努力も怠ることはできません。コストと技術を両立させること、最先端の技術を研究開発し続けることなど、課題は無数にありますが、すべてにおいて一步前へ出る判断の基準は、目先の利益ではなく、倫理観や良識であるべきだと考えています。

環境産業は世界不況の時代を切り開く鍵ともいわれていますが、御社としてはこの先5年後をどのようにイメージしておられますか。

林／今より事業規模が拡大し、新技術もさらに増えていると想定されます。単なる希望的観測ではありません。廃液のリサイクル率を、5年後には現在の20%程度から80%まで高めることができる見通しが具体的に立っているからです。それにあわせ、「産業廃棄物の処理会社」から「資源循環会社」への転換を図る予定です。

現在、2034年までの「未来年表」を具体的に作成している途中です。2034年というのは私が67歳とな

る年、つまり現役を退いて後進にゆだねようと考えている年です。現状では資源循環会社としてある程度の完成形を見たいと考えている10年後ぐらいまでのイメージが、ほぼできあがっています。この「未来年表」を全社員と共有し、企業としての「あるべき姿」、そして社員としての「あるべき姿」を全社で確認し合いながら、めざすポイントに向かって歩を進めているわけです。

ところでNUPRIでは「スポーツを生かしたまちづくり」に力を入れています。御社は先代の時代から、高校野球の人材育成や後進指導に非常に熱心なことで有名ですね。

林／私自身、子どもの頃から野球三昧でした。高校時代は甲子園をめざし、大学時代は東京6大学の1校の野球部に所属するという、典型的な野球人間。父が最も熱心な指導者であり、支援者でした。

でも、必ずしも順風満帆だったわけではありません。全国の高校球児が集まる大学野球部は部員数160人。新人戦でこそレギュラーになれたものの、その後はまったくダメで、全国レベルとの実力差を痛感しながら、自分の居場所を必死で確保するという苦しい日々が続きました。

でも歯を食いしばり、腐らず、全力で野球に取り組むことを自分に課したのです。その経験のおかげで、人の痛みを理解できるようになりましたし、ほかの人の地道な努力にも目が向くようになりました。経営者としてかけがえのない経験をしたと、今では心から思えます。それを後輩や子どもたちに伝えていくことも、役割のひとつと思っています。

株式会社みすず工業

本社所在地 長野市大字大豆島 4020-3

TEL 026-221-3838

URL <http://www.misuzukogyo.co.jp/>

人・まち・しごと

第3回



古澤工場長と若手花火師

信州煙火工業株式会社
代表取締役社長 藤原 信雄 さん
工場長 古澤 義勝 さん
(2008年11月20日)

イメージを念じて造り、打ち上げる…
多くの人々が感動を共有する
「一瞬」のために

伝統の技を継承しつつ新たな技術を取り入れた花火のつくり手として、また全国に冠たる長野県の煙火産業の牽引役として、花火に情熱を傾ける信州煙火工業。多くの人に夢をもたらず、「一発」が花火を愛してやまない職人たちの手から今日も生み出されています。

信州が日本有数の花火王国であることは広く知られていますが、イベント、製造を含め、なぜ長野で「花火」がこんなにも盛んなのでしょうか。

藤原社長（以下藤原）／「信州の花火」が全国的に注目されるようになったのは、やはり長野オリンピックの開

閉式、あの花火に負うところが大きかったと思いますが、それ以前から長野県の花火生産額は全国第1位でした。花火産業は、長野県を代表する産業のひとつとして長年にわたり位置づけられています。

特に長野市内で花火が盛んな背景には、西長野や安茂里を中心とする地域の神社の祭礼における奉納花火の伝統と、その成功のために製造技術が培われてきたという歴史があります。

花火製造は江戸時代から行われていたそうですが、明治期にはそうした奉納煙火をより素晴らしいものにするため、三河の職人を招くなどして技術の向上を図ってきました。その流れを汲む花火業者が、当社や安茂里の青木煙火さんです。

加えて、各地域に必ずいる熱心な花火虫員の有力者を中心に、地域ぐるみで花火を守り育てる気風も受け継がれ、私たち煙火業者との地元の皆さんとの深い絆が培われてきました。

古澤工場長（以下古澤）／地元と花火会社は単に発注者と業者という関係ではないのです。私たちは、毎年、地元の方々と構成される保存会や煙火会の皆さんと組んで、専門家として指導したり火薬の調合に取り組んだりといった役割を通じて祭りを支えます。地域の伝統文化の一端を担っているという自負を常に持って臨んでいるのです。

「日本一美しい晩秋の花火」として、すっかり全国的な知名度を得た「長野えびす講煙火大会」も、先人達の情熱によって100回を超える歴史を刻んできたわけですね。

藤原／100回も続いているというのは、素晴らしいことですね。私も花火業者はもちろんです。長野市、長野商工会議所、そして地元の商店街の皆さんなど地域の方々の思い入れが非常に強い大会です。

その伝統を築いた第一人者は、現市長のお祖父さんに

あたる鷲澤平六翁だそうです。身銭を切って大会の存続を支えたという逸話が残っていますよ。ご自分が花火虫員だったというだけでなく、何万人もの市民が一斉に楽しめる、かけがえのないものという意識を持つておられたのでしょうかね。

まさに「まちづくり」の発想ですね。実際、花火というのは、造り手と観客が一瞬にして感動を共有し、一体感で結ばれる、素晴らしい文化だと思います。

藤原／花火が地域の活性化や発展につながるとしたら、こんなうれしいことはありません。今後もいろいろ可能性に挑戦していきたいですね。

古澤／実際の煙火大会では、できるだけ観客寄りの位置にいて、人々の反応を肌で感じるよう心がけています。観客の皆さんと一体感を感じられることは、花火師にとってもうれしいことです。

藤原／どんな自信作でも、現場で打ち上げて、実際に開いてみないと成否は決まらない。「一発勝負」の厳しさは昔も今も変わりません。花火師は造る段階から上がった時のイメージを頭に描き、祈る思いで打ち上げる…古澤／それだけに夜空で思い通りに開いた時の喜びは、言葉では表現し尽くせません。コンクールなどに出場するのも、賞が目的というより自分たちが技術をより高めていくためのステップです。全国で同じように活躍する花火師同士の交流の機会としても貴重です。

藤原／しかも、地域の人々の花火への思いは、土地土地で異なるのです。そう考えると、やはり花火と「まちづくり」は深い縁で結ばれているようですね。

信州煙火工業株式会社

本社所在地 長野市問御所町 1302
TEL 026-232-3782
工場 TEL 026-235-3479



株式会社タカチホ
代表取締役社長
久保田 知幸 さん
(2009年6月2日)

**多角化、多部門化し、事業の幅を拡大。
「消費者が望むものを提供する」姿勢は
ブレることなく。**

「余暇」という市場の拡充に多面的に取り組む株式会社タカチホ。

時代の変化を読み取りながら、それに対応するのみならず、新たな価値の創造に積極的に挑戦し続けていきます。

過去最高の観光客入り込み数を記録した平成21年の善光寺御開帳が閉幕しました。『みやげもの』の卸、商品開発、店舗展開に携わっておられるお立場から見ると、率直な感触はいかがだったのでしょうか。

久保田／「おみやげ」という範疇だけでとらえると、「売上げ」は思ったより伸びなかった。「もっと売れたはずだ」という現象はあったといえるでしょう。実際、観光客がみやげものに使う金額や、購入商品の単価が下がったことは否めません。

しかし、たとえばスーパーの食品売り場や、百貨店の地階で購入された土地の名産品などは「おみやげ」の売上げとしては、数字が表に出てきませんが、そういう買物

する観光客は確かにいます。そうした消費者の感覚に売側が追いついていない。それを思い知らされたのが、今回の御開帳だったといえるかもしれません。

近年、消費者の購入傾向は「単価が低く数があるもの」か、「少量で高価でも味や品質が好みに合うもの」に、完全に二極化しています。中途半端は選ばれないのです。価格帯の中心がどこにあり、何が購入の引き金になるかを研究しておいでの小売店さんと、そうでない小売店さんの差は大きいですね。

団体からファミリーへ、ファミリーからさらに小さな個性へ、そして個々の観光客の動きも周遊型からピンポイント型へ：といった観光ニーズの構造的な変化に対応し、「みやげ」も変わっていかなくてはいけないと考えます。

新幹線の延伸による環境変化など、大きな課題に立ち向かうなかで、「おみやげ」は「長野の魅力」の一要素としてますます重要な位置を占めるものになるはず。その観点から、御社の取り組みをお聞かせください。

久保田／その時々により「満足してもらえない商品」「リピートしてもらえない商品」を企画・販売することに尽きると感じています。

最優先である「安全・安心」に加え、観光客が「信州」に求めるものを的確にとらえ、地域の個性や特徴を十二分に生かした商品、店舗、サービスを提供していかなくてはなりません。その一環として、全国30拠点のマーケット情報を常時収集し、そのデータを生かした商品開発、店舗開発、さらには、地域の小売店さんへのアドバイザーやサジェッションを行う体制を整えています。

また、長野県観光土産品公正取引協議会の会長を務めていますので、全国の関係者との連携や情報交流を通じ、長野の観光全体の意識の底上げにもますます尽力していきたいと考えています。

温浴事業部として展開していただける「湯ったり苑」も、

地域の人々が時間を消費するという意味で、「観光」の一環と見ているのですが。

久保田／そうですね。人々に「非日常」を提供する「レジャー・余暇」の一環として、「観光みやげ品」「アウトドア」などと並ぶ経営の大きな柱に据えています。

温浴施設に関しては、たまたま本社近隣の土地が空いたのが着手のきっかけだったのですが、観光そのものの構造変化による市場の縮小傾向を補うものとなりました。既存施設との差別化を図るため、施設に十分な投資を行い、評価のいいリラクゼーションのテナントを選定するとともに、「食」の面でも気を使い、利用者の満足度を高める工夫をした結果、おかげさまでお客様の滞留時間が長く、8割がリピーターという結果になっています。

長野のほか、新潟、仙台等にも出店していますが、すべて長野と同様にしているわけではありません。単に数を増やすのではなく、出店エリアの状況や、人々の生活形態、嗜好などニーズに応じた個性を大事にし、その地域にとってなくてはならない施設づくりにこだわりたいと思っています。また、天然温泉の掘削などにより、競争力を高める努力も続けています。建築や温泉掘削にかかるインシャルコストは確かに小さくありませんが、建設不況という時代を逆手にとり、可能な限りコストを抑えながら進めてきました。

その視点の的確さが、この時代に上場を果たす力になったのでしょうか。

久保田／上場に伴い、大手企業と同様の会計基準が適用されることとなり、正直、試験を感じることも多い昨今です。とはいえ、60周年という節目を迎えたこともあり、各事業ならびに商品のブランド化を推進し、当社自体のブランド化を強固に図っていくことが当面の課題です。

株式会社タカチホ

本社所在地 長野市大字大豆島 5888
TEL 026-221-6677 (大代表)
URL <http://www.takachiho-net.co.jp/>

善光寺御開帳の盛り上げに一役

「御開帳く祈りと賑わい」をテーマに

NUPRI 寄席

盛況のうちちに成功

平成21年5月23日(土) 17時30分開く 北野文芸座にて開催

過去に例を見ない観光入り込み客数を記録した今年
の善光寺御開帳。4月から5月の2ヶ月間、善光寺境内
や善光寺表参道を中心に、長野市街地とその周辺は華や
かな賑わいに包まれました。

NUPRIでは「平成21年善光寺御開帳研究部会」(室
賀部会長)を中心に、まちづくりの立場から御開帳の賑

わいを支援するとともに、市街地に笑顔を増やしたいと
寄席を計画。御開帳の会期終了を一週間後に控えた5月
23日、北野文芸座で「NUPRI寄席」を開催しました。
事前のPR活動が効を奏し、関係者、一般入場者合わせ
多くの方々が来場され、385席の場内がほぼ満席とな
る盛況でした。

NUPRIの活動をアピールするアナウンスに続き、
善光寺淵之坊副住職・若麻績享則氏が御開帳ならびに翌
日の屋台巡行(弥栄神社御祭礼)に関する由来や御利益
について、ユーモアを交えた講話を行いました。

続いて、真打・三遊亭遊史郎師匠による落語『お血脈
(けちみやく)』、最後に三遊亭小遊三師匠による落語『金
明竹(きんめいちく)』が披露されました。話のおもしろ
さと芸の魅力にすっかり引き込まれ、場内にはなごや
かな笑いが絶えず、まさに「祈りと賑わい」が笑顔で体
現されるひとときとなりました。

なお、入場者には3月のNUPRI全体懇談会で講演
された絵地図師・高橋美江さん制作の「善光寺界限散策
絵地図」が進呈され、大いに喜ばれていました。絵地図
片手に市街地あるきを楽しむ方々が賑わったなら、NU
PRIとしても喜ばしい限りです。

